



「さばき」のない世界

『弥陀の本願には老少善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。そのゆへは罪業深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。しかれば本願を信ぜんには他の善も要にはあらず、念仏にまさるべき善なきゆへに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆへに（歎異抄）』

* * *

上の歎異抄第一章は、これが心から自然に頷ければ、真宗の他力の教えをよく聴聞したことになると思われてきた親鸞聖人のお言葉です。

私たちは日々、善い（役立つ）人、悪い（役立つでない）人、などと判定しながら生きています。それは、心の中だけでなく公のメディアでも連日繰り返されています。

しかし、親鸞聖人がよるこぼれた世界は、阿弥陀仏が、すべての凡夫を救うことができなければ私は仏にはならないとまで誓われた大慈悲の世界、私たちには思いもつかない深い願い（救い）の世界でした。それを知らされ気づかされるとき、私たちは共々に

いのちのふれあう世界に生き生まれ、無量のいのちとして生き続けるお互いであり、そのために何の条件もないと知らされ、ありがとうございます、という心が起こった瞬間、悪人であれ善人であれ、健康であれ病気であれ、どんな状態にあっても万人が味わえる幸に気づかされるのです。

* * *

殺人ですら、戦争での大量殺戮は英雄になったりします。もともと人間には真の善悪を知り抜く知恵はないのです。なぜなら、賢善であるのは自分であり愚者や悪人は自分以外の人であると思ひ、また、時代による善悪（利害の偏った価値観）にとらわれてしまい、そのことが憎しみや争いを繰り返して招いています。そこにあるのは、他人だけでなく自分をも欺き続けている煩惱にまみれた人間の姿であり、常に自分を誇り、他を責め、嫉妬、傲慢、卑下、絶望、恐怖などの煩惱に苛まれる人間の愚かさです。

人間が構成している社会である以上、何かで是非や善悪のけじめはつけなければなりません。法律も道徳も絶対ではなく、その判断を下す人間には常に身勝手な煩惱が

あることを忘れてはならないのです。

浄土真宗のお念仏（他力）の教えは、自分の中にある悪の部分への気づきに導いてくれるものです。それは、善悪ともに無意味であるとする虚無主義ではありません。善も悪も、一様に摂取されていく仏の大慈悲の中に生かされているお互いを気づかされる世界です。それは、善悪ともにおさめとる平等の功德を知らされ、かりそめの善を誇る自分を恥じ、その業への悲しみと同時に、他の人々の行いに対してもいたわりと同じ悲しみへの思いやりが生まれてくる気づきです。そこにはじめて、晴れ晴れと懺悔し、共々に和みあって生かされる「さばきのない世界」が開けてくと説かれています。

世界や社会には、謝罪ばかり求める思い上がり、他への無理解と独善的な価値判断、一方にはそれ（善）を逆手に取って社会へごり押しをする甘えが溢れています。

親鸞聖人のおっしゃる「悪人」とは他人ではなく、いつもご自身のことでした。だからこそ、阿弥陀如来の慈悲をよるこぼお念仏のご生涯だったのです。 合掌

奏庵法座

秋のお彼岸

日時
9月26日(月)
午前11時より

「みほとけに抱かれて」

阿弥陀経

法話

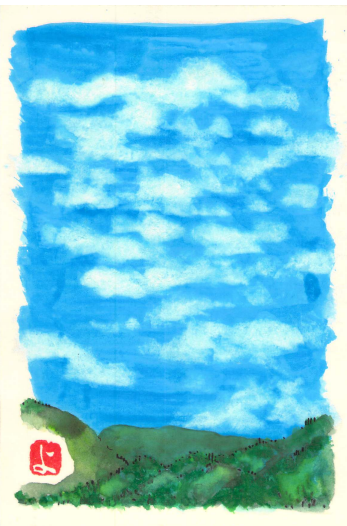
ご文章拝読

「恩徳讃」

～*～

おとぎ

台風、大雨の被害が懸念されている日本列島ですが、北海道のお彼岸を勤めた帰路、飛行機から見下ろす平野には、黄金のグラデーシンの実りの秋が広がっていて、思わず頬がほころび、改めて尊い恵みが失われてしまわないよう、周りのものに対して無理強いをしていないか、傲慢になってはいないか、省みなければならないとの思いをしました。お彼岸もその尊いご縁です。どうぞお参り下さい。



永代経

今月21日、秋の永代経法要を勤めさせていただきました。永代経とは、お経の種類ではなく、「永代読経」の略で、「末長く(永代に)お経が読まれ、仏法が途切れることがないように」という意味を持っています。その願いを持って、納めるのが「永代経懇志」であり、その報恩の思いを受けてお寺が開く法座が永代経法要です。

龍溪寺では、春秋のお彼岸に合わせて年2回、永代経懇志、またはそれに準じたお布施を上げられた施主様に案内を差し上げお勤めしています。故人の、永代にみ教えが伝わって後々の人たちが仏法にふれてくれるようにとの思いの継承をさせていただき法縁です。

彼岸中には、故人の法名を記した法名軸をお掛けして顕彰させていただき、み教えを伝えて下さった遺徳を懐かしく偲び、何より私自身の聞法の姿勢を次世代に伝えていく法要は、同じ願いのお念仏の仲間が集いいつも和やかに勤められています。当日お参りできず、お送りいただきました法要懇志、お供物はご仏前にお供えさせていただきました。ありがとうございました。

永代経や仏事、宗教へのご質問、疑問は、ご遠慮なくお尋ねください。

昨夏に判った癌との共存から一年が過ぎた。たとえ発覚以前に戻れたとしても、すでに若さも健康も衰えつつあった年代だから、こうして何とか日常が送れている今を無事と言わずにいつを無事と言うのかと、「とりあえずの無事」を「有難い」こととは思えども、もたついたりして、不安そうな目を向けられたり、かといって労られないのも不本意で、そんな身のほど知らずを恥じつつ達観できずにいる。■それを思うとき、天皇の「生前退位」の中に、同じ老いゆく者の老いきれずにいる半生(なま)な悲しみを思う。そして、戦後急に人間であるとされた、あの昭和天皇のぎこちなさにこそ、身の上を背負った無私の姿があったなと思い出す。■一昔前までは寺の世界でも、音痴でお経が酷くても、年輪を経た老住職が葬儀のあとの席でもご機嫌で、いつまでも腰を上げなくても、親に死なれ小学生で寺を継いでも、共々にかげがえのないものとして長いスパンで世代が移っていったものだ。そしてそれが、世襲を背負わせ辛い宿命を乗り越えさせていたのかもしれない。■今では寺も定年のような継承が主流となっているが、一方で多くの寺が後継者と護持の問題を抱えているし、安泰だと喜んでいても、若い方が先に亡くなることも珍しくない。命に順番はないことを説く僧が、住職という立ち位置を指すだけのものを、仰々しく「ありがたい」とするのは、現実問題の解決に遠いと思わされる。■大仰な言葉「アスリートファースト」や「都民ファースト」などの裏には「我」が隠されているように、天皇の「国民と共に」も、ご自身の憂いを薄めてはいないだろうか。ご自分の血を受け継いだ皇室の永遠を願い、それが現代のモラルとの両立の間で既に限界にきているとはっきりおっしゃればいい。その上で、なされるようになさって勤め終えられ、あとは「よきにはからえ」がいい。それもまた潔い。それこそが、のちに続く皇族のみならず、常に思うようにならない人生を歩む国民へのお手本ではないだろうか。

Norimaru